[スコア]
トーク・トゥ・マア・トーク
Talk to Maa Maa
ドールマイト
Dollmite
ザ・ブラザー
(フィーチャー・ベネデッド)
Hidden Feed

[特別企画]
世界最老の女性ギタリスト
日本のベニシオ・ギター
青春ロード旅行編！
「ブルース その1」

ブラジリアン・ジャズ・ギターの現在進行形

Chico Pinheiro

[Special Interview]

先頃行われたボブ・ミンファー・ビッグバンド待望の初来日公演、そこでヴォーカルのカート・エリングと共に大きくフィーチャーされたのが、このシコ・ピニェイロだ。ベネデッド製アーキトップを携えてのストレートアヘッドなジャズ・プレイは実に新鮮な感覚に満ち溢れていた。現在34歳、故郷サンパウロを拠点に世界的に活躍中で、現に彼国ブラジルでは珠玉なギタリストの神童入りを果たしている。

インタビュー・文：石沢功治
Text by Koji Ishizawa
通訳：川原真理子
Translation by Mariko Kawahara
取材協力：ブルーノート東京

ジャズ・ギタリストとしての顔と弾き語り奏者としての顔

Q：最初はクラシック・ギターとピアノをやっていたそうですね。

シコ・ピニェイロ（以下CP）：そう、母親が2つの楽器を弾いていた影響で、6歳の時から習い始めた。でも強要されたわけじゃなく、あくまでも良好だったし、そのうち正式にレッスンを受けるようになって、クラシックは反より、バーデン・パウエルをはじめとするいろんなブラジルのギタリスト達も聴くようになっていった。

Q：エレクトリック・ギターを手にするようになったのは？

CP：彼が13か14歳の頃。ちょうどジャズに興味を持ち始めた頃と重なる。コルトレーンがジョニー・ハートマンとやってるアルバムを聴いて、なんて美しいんだと思った。

Q：ロックは聴きましたか？

CP：うん、ジミ・ヘンドリックスは大好きだよ。母親がそうだったんだけど、とにかくあらゆる音楽を聴いていた。そのお陽で、14歳頃から地元サンパウロでスタジオ・ミュージシャンとしてレコーディングやギグでお金を稼いでたよ。でもご承知の通り、音楽だけで生計を立てて行くのは難しい。それで地元の大学に進んで物理を専攻したんだけど、やっぱりきもんじゃ、ジャズを勉強したいと思い、どうせやるんだったら本場だと、それで、1986年にバークリー音楽院の奨学金制度に申し込んだら受かったんで、渡米したんだ。

Q：そのあとはしばらくアメリカにいたんですか？

CP：いや、'88年に卒業して、NYへ行こうと思ったんだが、ちょうど母が病気になってしまって、父の助言もあってサンパウロへ戻ることにしたんだ。今は完気だけれど、だから在学中の2年間以外はアメリカにに住んだことはない。でも、その後も最低でも年に5～6回はNYへ行ってる。

Q：あなたはフュージョンスタイル・ギターと歌による弾き語りもそれぞれ、その一方で、エレクトリックでストレートアヘッドなジャズもプレイします。それら2つのスタイルは、あなたの中では全く別物なんでしょうか、それともある程度リンクしてるのかなんでしょうか？

CP：とても興味深い質問だね。僕の中では全くセパレートしてる。実は歌を始めたのは'05年からと、僕の中では随分あとになってからなんだ。それまではジャズであれ、ブラジリアン音楽であれ、クラシックであれ、ギタリストとしてプレイしてた。もちろん作曲はしてたけどね。

Q：それは意外ですね。私はてっきりトニニョ・オルタなどからの影響で、昔から歌っていたんだと思ってました。歌を始めた切っ掛けは？

CP：リオにあるレーベルのオーナーで、コンポーザーでもあるフランシス・ハニーという人物がいるんだけど、彼と音楽的な議論を交わしていたら、「自信はあるんじゃないか」と言われ、「歌いなさい」と言って、勧められたんだ。

Q：つまり、あなたがそのレーベルでアルバムを制作する際に、そのフランシスから「歌ってみたら？」と言われた、ということですね。

CP：そう、そこからアルバムを出したことはない。あくまで自分ほどは及ばズ。

Q：だったら拒否も出来たわけですよね？

CP：確かにそうで、最初は歌にかなりの抵抗があったよ。僕はどちらかというとシャイな性格なんでね（笑）。でも、彼と話しているうちに、取り敢えずやってみようという気になったんだ。というのも、ジョアン・ボスコ、ジョルジュ・ベン、ドリヴァ・カイミなど、僕の好きなブラジリアン・ミュージシャンの多くが歌いながらギターを弾いてる。バーデン・パウエルも昔は歌ってたし、とにかく祖国ブラジルではとてもポピュラーなスタイルだというのが大きな理由だ。まぁ、その一方で、ギンガのように頃なに歌うことを嫌ってる人もいるけどね（笑）。

Q：今弾けた人はエレクトリック・ギターは随分かないですよね。その点、あなたは同方でプレイするのが特徴です。そういったあてトニニョ・オルタに近いと言えると思いますが、ただ、彼もあなたほどストレートアヘッドなジャズはプレイしませんし。

CP：きっかを言っただけだ、僕はとにかくやろうと思ったら、その脳の本能に深ぜたいという性分なんだ。だからパークリーの門を叩いたし、その後も本気でジャズ・ギターに取り組んで来ているつもりだよ。

好きなジャズ・ギタリストを3人挙げるとしたら？

Q：バークリーではミック・グッドリックに習ったそうですね？

CP：そう、2学期間ね。とても興味深いレッスンだった。ギターを弾くばかりじゃなく、たまに飲会行こうって誘に出て、例えばその日発来る音楽とか、いろんなものから学ぶことを教わることが出来るというように、哲学的なことも教えてくれた。僕にとってはとてもいい先生だったよ。

Q：好きなジャズ・ギタリストを3人挙げるとしたら？　もちろん沢山いるとは思いますが、そこを敢えて。

CP：敢えに選ぶ質問だな（笑）。全体代を通してかい？　それともコンテンポラリーに限ってかい？

Q：うーん、どうしましょうか……（笑）。じゃあ、限定する人数からにしましょうか。

CP：みんな友達なんで選れた人達に悪いな～（笑）。

Q：そこをなんとか（笑）。

CP：OK。カート・ローゼンウィンケル。とにかく今のNYを中心に活躍している若手一中堅の大半が彼から多大な影響を受けている。現在のジャズ・ギター・シーンに欠けて最も重要な存在なのは、誰の目から見ても明白な事実だ。ジャズ・ギターで言ったところのブラッド・メルドーのようなとらの国だな。

Q：本当に そう思います。続いては？

CP：ジュリアン・レイジだね。彼はどこかフォーキーなところがあって、そこが大好きだ。そういえば、この間レコーディングしたんだよ。ジュリアンとアンソニー・ウィルソンとスティーヴ・カーディナスと僕のギター4本だけで、メトロポリタン美術館でのライヴ録音なんだ。

Q：それは知りませんでした。もうリリースされてるんですか？

CP：されてるよ。『Seasons』というタイトルだ。

Q：残る1 人は誰ですか？　ローゼンウィンケル、ジュリアンと来て、興味津々です（笑）。

CP：うーん、あと2人じゃダメかい？

Q：いいですよ。

CP：アンソニー・ウィルソンとマイク・モレルだ。リリースに伴うプロモーションで、約1ヶ月ほど滞在していろんなところで演奏して回った。サパス東京を始めとするクラブ・ギグ、あとテレビに出たりもしたな。

Q：昨年は大震災で大きなダメージを受けました。1次取扱の日本はいかがですか？

CP：最初のときも感じたけれど、とても美しい国だと思うよ。昨年の災害は地球の裏側でも大きく報じられた。僕もなを痛めたけれど、こうして再び日本にやって来れてとても嬉しく思っている。東京のホテルと演奏場所のブルーノートを往復していう限りでは、街並も人々も平穏を取り戻していて、あの惨劇が嘘のようだけど、被害地は未だ本復興が進んでいないところもあると聞いた。一刻も早く立ち直ってほしいと切に願っている。

▲ボブ・ミンファーのビッグバンドでの来日では大きくフィーチャーされていた。　写真提供：ブルーノート東京／撮影：佐藤拓央

Q：今回のボブ・ミンファー・ビッグバンド公演で特に来たたベネデッド製アーキトップを携えてのストレートアヘッドなジャズ・プレイは実に新鮮な感覚に満ち溢れていたなのでこの辺りのことを聞いたら、「好きなやつを選んでいいよ」というのでBravo Eliteモデルを選んだら貸してくれたんだ。今現在、僕のためにベネデッドがこのBravo Eliteモデルを基にしたスペシャル・ギターを製作中なんだよ。

Q：それまでは何を使っていたんですか？

CP：1960年代後半のあいだゾノン65-175だよ。

Q：アコースティック・ギターはナイロン張ですが、どこの？

CP：ブラジルのルシアーのアントニオ・テヤリンゼ。僕のこれまでのアルバムのアコースティックは全てこれだよ。ジャケットにも写っているけど、カッタウェイになっている。

Q：ところで、日本は何回目ですか？

CP：2回目だ。最初は歌手ホーザ・バッソスのバックで確か00年だったと思う。彼女のアルバム・リリースに伴うプロモーションで、約1ヶ月ほど滞在していろんなところで演奏して回った。サパス東京を始めとするクラブ・ギグ、あとテレビに出たりもしたな。

Q：昨年は大震災で大きなダメージを受けました。1次取扱の日本はいかがですか？

CP：最初のときも感じたけれど、とても美しい国だと思うよ。昨年の災害は地球の裏側でも大きく報じられた。僕もなを痛めたけれど、こうして再び日本にやって来れてとても嬉しく思っている。東京のホテルと演奏場所のブルーノートを往復していう限りでは、街並も人々も平穏を取り戻していて、あの惨劇が嘘のようだけど、被害地は未だ本復興が進んでいないところもあると聞いた。一刻も早く立ち直ってほしいと切に願っている。

ベネデッドがシコのためにスペシャル・モデルを製作中

「There's A Storm Inside」
シコ・ピニェイロ
CT（Sunnyside）DDCJ-1009

◀現在シコが携えて来たロバート・ベネデッド製Bravo Eliteモデル。インタビュー中にもあるように弾り増で、ベネデッドが彼用のギターを製作中とのこと。低はオクターブの012からのセット。